

今水寺

<歴史メモ>

(参考：新城市誌，新城文化財案内，三遠の山寺)

^{ひえい}比叡山や高野山をはじめとして，山中にお寺が建てられるようになった平安時代，^{きちじょうさん}吉祥山の中腹に今水寺ができた。弘法大師の開山という言い伝えがあるが，その流れをくむ真言宗のお寺であったことは確かである。

本堂に十一面観音を祀り，その傍らに熊野三社権現を鎮守とし，さらに奥の院として吉祥山に吉祥天が祀ってあった。僧坊は，東谷に8坊，西谷に4坊あったといわれ，今もはっきりした寺跡の平坦地がいくつも残っている。富賀寺に残る古文書には21坊と記述されている。これは村里にある系列の寺の数を合わせた数と考えられているが，14世紀には当寺で21坊が整備されていたと推測される。

熊野神社の下に^{ちごいふじい}稚児井，藤井という清水の出るところがある。これがいわゆる「三河の三名水」の一つとされている。また，八名井の由来となった八つ井戸に数えられている。(他に，岩井，小井，大井，桜井，柳井，亀井がある)

今水寺は現在，僧坊もなく古記録もほとんどが亡失しているが，唯一残された記録として，天正17年(1589)の検地帳写しがある。それによると，表紙に今水寺領とあり，その右側に源頼朝，左側に今川義元の名が読み取れるが，これによって鎌倉時代には源頼朝から寺領を寄せられ，戦国時代には今川義元の保護を得たことがうかがえる。

この大寺院が，野田の戦いのころに武田軍に焼かれてしまったと言われているが，天正の末には12坊も大方なくなり，慶長年間(1596～1614)には熊野神社と本尊を祀った観音堂だけであつたらしい。これらのことから，今水寺の全盛期は鎌倉・室町期であったと考えられている。

三河の三名水とは

- ・大木の鑓水(豊川市)
- ・稲木の吉水
- ・八名井の今水(いまみず)
(稚児井・藤井)



小堂の右に稚児井，左に藤井